

人間を知る【文学散歩】 講座コード 1122

漱石『三四郎』の東京を歩く
—東京文学散歩—

講師：小川 和佑（前明治大学文学部講師）

4月～7月 土曜日 13:00～14:30

12,000円（全6回）

● 講座趣旨

夏目漱石の小説「三四郎」は1908年（明治41年）9月1日より同年12月29日まで「朝日新聞」に連載された。

この小説は九州から上京した23歳の三四郎が初めて体験する東京の諸相を描いたものである。三四郎の眼で描かれた東京の街と人とはいまは失われた20世紀初頭の頃の東京の姿である。この100年に近い以前の東京と現在21世紀の東京を比較検討しながら、東京の街と人とはなにを失い、なにを創造したかを、原地（現地）に即して論証する。

これは新しい近代文学研究方法への試みであり、そのために旧新橋駅（汐留駅跡）から本郷追分、東京キャンパス、池之端までの三四郎の足跡を2回、または3回に涉って、街頭で講義しながらフィールドワークする。

● 講義概要

- 第1講 講義概要の説明と「三四郎」の解題 4月28日
明治40年代の東京と三四郎という青年について。
現代の学生と三四郎とを比較して、何が変わったか。
- 第2講 第1回三四郎と歩くフィールドワーク 5月12日
『東京大学に明治の面影を求めて』
《コース》明大前出発→三四郎池→昌平坂→神田神社→妻恋坂→本郷三丁目（和菓子『藤村』で休憩）東大赤門→本郷追分→三四郎池→弥生門→池之端（解散）
- 第3講 第2回三四郎と歩くフィールドワーク 5月26日
『街並街道に文明開化を見る』
《コース》明大前出発→淡路坂→紅梅河岸跡→万世橋→外堀通→神田橋→東京駅（解散）
- 第4講 第3回三四郎と歩くフィールドワーク 6月9日
『銀座文化風物誌』
《コース》明大前出発→お茶の水駅→東京駅下車→日比谷→有楽町→中央通（銀座）→新橋駅→鉄道唱歌碑→ゆりかもめ新橋駅（汐留駅跡）（解散）
- 第5講 「三四郎」フィールドワークの印象を語る 6月23日
受講者のフィールドワークの感想を語る。可能ならばリパティタワー23階の喫茶室で。
- 第6講 熊本から東京へ・「三四郎」の風土 7月14日
東京と地方、その風土と文化を語り、この100年の東京を検証する。

テキスト・『漱石「三四郎」の東京学』（NHK出版・1,400円）

フィールドワークは軽装で。雨天の場合は中止とし、学内の講義とする場合があります。

● 講師紹介



小川 和佑（おがわ かずすけ）

文芸評論家・東京電機大学講師。前明治大学文学部兼任講師。日本文芸家協会会員。1930（昭和5）年東京目黒生まれ。明治大学（旧制）文芸科卒。主著に『伊東静雄』（講談社）、『三島由紀夫少年詩』（冬樹社）、『立原道造詩集・全注訳』（明治書院）、『桜の文学史』（朝日新聞社）、『桜と日本人』（新潮社）、『刀と日本人』（光芸社）、『日本の桜・歴史の桜』（NHK出版）、『東京学』（新潮社）、『漱石「三四郎」の東京学』（NHK出版）。

● 参考図書紹介

1908年—2001年

—三四郎と歩く東京へようこそ—

1908年、遠く熊本から上京し、帝国大学へ入学した。その三四郎が見た東京、そして歩いた東京。1世紀近くを経て、東京は何が変わって何が変わらなかったのか。新橋、銀座、丸の内、神田、御茶ノ水、本郷、そして五高時代を過ごした熊本と、三四郎が歩いた足跡をたどりながら語る、大ベストセラー『東京学』の著者が贈る新しい東京学。

『『三四郎』の東京学』

小川 和佑 著

NHK出版 定価 1400円＋税



● 関連図書紹介

もう一つの日本美—美こそ武を征する—

戦後多くの読者に深い影響を与えたベネディクトの『菊と刀』、新渡戸稲造の『武士道』を超越する正統な「日本のこころ」を描いた新しい日本論。記紀神話、万葉集に日本人を見ながら、「美の殉職者」後鳥羽院を論じる。刀剣の王朝文化、桜文化を具現する院の理想から600年、再び武器になり幕末から近代に至る思想の象徴となった刀剣の数奇な運命を紐解きながら日本人を論じる文芸評論である。

『刀と日本人』

小川 和佑 著

光芸社 定価 1600円＋税

